

奈落の妖星、生きる骸

あばたか

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この物語はゲームには登場しない、

完全妄想、推測のやつです。

ぜひ、お読みください。

# 目次

骸まとう籠

---

1



# 骸まとう龍

「ここか？ 竜ノ墓場つーのは」

骨、骨、骨。骨が積み重なり、島のようになっている。

上からわずかな光差し込む、洞窟のような場所の内部、

竜ノ墓場。

そこに足を踏み入れるはハンター。モンスターを狩る――を生業としている者だ。

と、いうことはここにもモンスターがいるのだ。

そのモンスターとは――

---

---

ある日、村は一夜にして消えた。

ある日、その村に異形のモンスターが現れた。

双頭の龍、頭が2つあるのだ。目と思われる部分からは妖しく光を放っている。そして他のモンスターの骨を纏っている。

外観、骨格はヒドドラに近く、体には大きく目立つ2つの骨がある。

これも双頭の龍のものでは無い――。

「逃げろー！村の外へ避難するんだ！」

「子供が中にいるのよ!?そんなこと…」

「熱い！助け！」

「お母さん！お母さん！お」

双頭の骸は片方の頭から青いビーム―獲物を狩るための粘着液だ―を吐き出した。村の建物、木に人が絡められる。

もう片方の頭を持ち上げ、振り下ろす。

海の上の木の板、床は折れ、子供を抱えた女が海に落ちる。

せめて子供を救おうとしたのか、子供を投げたが、

双頭の後ろ、体にある穴から飛び出た粘着液に絡められる。

双頭の龍は頭を後ろへもつていき、背中の骨がおおしく動く。上に、上がる。そこには、龍とは思えない異形の真の頭があった。黄色く光る二つの目。眼球に縦の瞳がある。

口は頭の半分くらいの高さで中に無数の紅い牙が生えている。

そして青い。

片方の「腕」が村を破壊し、もう片方が人と建物を粘着してゆく。そして巨大すぎる口がそれを飲み込む。

ほとんどは噛まれず、丸のみだった。

突如、頭を中心に赤黒く光る。腕から同じ色のビーム状のプレス。残された建物は消し飛んだ。

そしてひととき大きな光が頭を覆った。

一瞬、村は明るく輝いた。それは希望の輝かしい光とは異なり、絶望に満ちていた。誰もが自分の死を悟った。

それは道端の草木も例外ではなかった。

赤黒い極太のビームが村を薙ぎ払い、すべてを焼き払い、

命輝かぬ絶望の地へと変えた。

「せめてあなた様だけは！」

「だが！しかし……！」

「早く！」

「くっ！！」

「最後にお名前を……！」

「ああ？俺の名前!?俺の名前はドウランだ！生きて覚えとけよ！」

「ああ……なんとということだ」

そこに一人の老人が立っていた。

すでに龍は去ったが、彼に怒りは見えなかった。

果てしない絶望、家族、仲間、すべてを失い、

「生きてしまっている」のだった。

老人は1週間、さまよい続けた。

その辺の草などしか食べるものはなく、老人は痩せていった。

その様は、まるで骸だった。



老人は、村を見つけた。

ベルナ村というらしい。

「これは……？ 私たちを襲った……？」

老人が問うと、茶髪の女性が答えた。

「オストガロアといい、骸龍、オストガロアです」

「……」

老人は決意した。

「オストガロア……奴を骸に……」

老人はオストガロアの討伐を依頼した。

6か月後……

1人のハンターが名乗り出た。

老人は感謝し、彼を竜ノ墓場へ送った。

そして、生きる骸を本物の骸へ変わった。

「本当に感謝します。私はもう死ねる……」

「何言ってるんだよじーさん」

「私はオストガロア村を滅ぼされ、何もかもを失いましたが、

いままで抱えて生きてきた奴を骸に変える、というのが、も

う叶ったのです。私は……」

「いやいや、いいつすよ。つかじーさん、名前は？おせーてよ」

「私の名は、……ですが……？」

「ふーん、俺はね……ドウラン」

老人は奇跡、というものを、体験したと今も子孫へ語り継いでいるらしい。

自らが犯した過ちの中にあつた奇跡、

出会いの中の奇跡、

そして、この世界そのものの奇跡を。

奈落の妖星、生きる骸

〈〈終わり〉〉